

RS ウイルス

Respiratory syncytial virus (RS ウイルス)は広範囲の年齢層の人に感染し、軽症の感冒様症状から重症の細気管支炎や肺炎まで、様々な呼吸器症状を引き起こします。特に乳児の初感染では下気道疾患を起こす危険性が高く注意が必要です。また、高齢者における重症の下気道疾患の原因としても重要になっています。RS ウイルスは大きく A 型と B 型の二つに型別され、一般に A 型の方が重症になると言われています。

2007 年から 2011 年 11 月の埼玉県内における RS ウイルス検出状況を臨床診断名別に集計した結果を表 1 に示しました。RS ウイルス感染症、気管支炎、細気管支炎以外ではインフルエンザからの検出が多い傾向でした。検出されたウイルスの型別は、2007 年はすべて B 型、2008 年はすべて A 型でしたが 2009 年以降は A 型と B 型の両者が検出されました。RS ウイルスが検出された患者の年齢はほとんどが 5 歳以下であり、このうち 2 歳以下の年齢層で全体の 76% を占めていました(表 2)。

RS ウイルスが検出された 66 検体のうち 9 検体では RS ウイルスとともに他のウイルスが検出されました(ライノウイルスとの重複 5 検体、ライノウイルス及びパラインフルエンザウイルス 2 型との重複 1 検体、ヒトヘルペスウイルス、ヒトメタニューモウイルス、アデノウイルスとの重複各 1 検体)。重複感染も多く、今後も動向の監視が必要です。

表1 RSウイルス検出状況及び型別

臨床診断名	2007	2008	2009	2010	2011
RSウイルス感染症	7	7	5	10	4
気管支炎		3	1	4	1
細気管支炎		2		4	
肺炎		1			
インフルエンザ		1	7	3	2
その他の疾患			1	1	2
合計	7	14	14	22	9
A型		13	8	13	5
B型	7		4	9	4
型別未実施		1	2		

表2 RSウイルス検出患者の年齢分布

年齢	0歳以下	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	91歳	不明
例数	19	19	12	3	7	4	1	1